

ブロッコリー（春播き夏穫り・夏播き秋穫り）

栽培暦

月	3	4	5	6	7	8	9	10	11
春播き	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	播種	定植	追肥	追肥	収穫				
夏播き					—	—	—	—	—
					播種	定植	追肥	追肥	収穫

栽培の特徴とポイント

春播き：幼苗期に低温に遭遇したり、栄養状態が悪かったりすると、ボトニング（早期出蕾）が発生することがある。適品種の選択はもちろん、育苗期の温度管理に注意する。

夏播き：生育初期の気温が高いので、育苗期の温度管理や水管理には十分注意する。

共通：外葉を大きく育てるため、肥料切れに注意するとともに、虫害や風害による葉の損傷を防止する。収穫適期幅が狭いので、穫り遅れないよう注意する。

品種

1 春播き

グリーンパラソル：頂花蕾の大きさはハイツよりやや大きい中生種。草姿は立性で、側花蕾の発生は少ない。
（タキイ）

ハイツ：頂花蕾の大きい中早生種。草姿はやや開張性で、側花蕾の発生は多い。
（タキイ）

2 夏播き

海嶺：頂花蕾の大きさはハイツと同程度の早生種。花蕾粒はハイツより小さく、日持ちが良い。草姿は半開張性で、側花蕾の発生は中程度。
（サカタ）

ハイツ：頂花蕾の大きい中早生種。草姿はやや開張性で、側花蕾の発生は多い。
（タキイ）

ピクセル：頂花蕾の大きさはハイツよりやや小さい早生種。花蕾形はハイツよりドーム型。草姿は立性で、側花蕾の発生は少ない。
（サカタ）

育苗管理

1 床土の準備

市販の園芸用培土を用いると便利である。

床土を自作する場合は、播種の7～10日前に作成しておく。作成例としては、無病の山土とパーク堆肥を2：1にあわせたもの100リットルに対して、そさい3号100g、過磷酸石灰200g、苦土石灰100gを混合する。

2 資材・種子の準備

ポットは、128穴セルトレイまたはペーパーポット10号(72穴)を用いる。

種子はコーティング種子が扱いやすい。10aあたり約4,000粒準備する。裸種子を用いる場合は、10aあたり約60ml準備する。

3 播種

床土詰めの後、ポットに植穴をあけ、1穴1粒播きとする。種が隠れる程度の覆土を行い、鎮圧した後十分に灌水する。

トレイは直接地面に置かず、底が空気に触れるようにする。

播種後は乾燥防止のため濡れ新聞紙や寒冷紗で被覆するが、胚軸の徒長防止のため、30~40%発芽したら除去する。

4 温度管理

1)春播き

3月下旬以降の播種では加温施設は不要だが、5℃以下になると生育が停止するため、保温対策が必要となる。

夜間5~10℃、日中25℃以上にならないよう管理するが、播種直後は出芽を揃えるため小トンネル等で平均20℃前後の温度を確保する。

育苗後半は特に換気に努め、徒長苗にならないよう注意する。

2)夏播き

晴天日は直射日光があたらないよう、日中は寒冷紗被覆する。定植4~5日前からは直射日光にあて、苗を馴化する。

5 育苗管理のポイント

1)灌水

毎朝培土の状態を確認し、天候に応じて夕方に表面が乾く程度の灌水とする。本葉2枚目が出葉するころからは、日中に葉が軽くしおれる程度の節水管理とする。

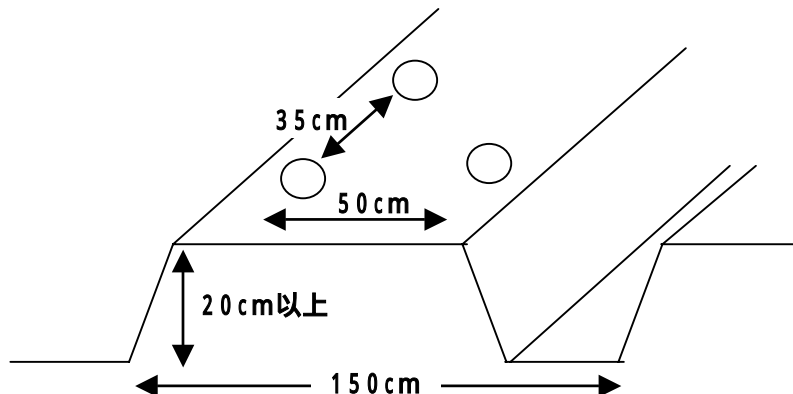
2)追肥

肥切れにならないよう子葉の色が薄くなり始めたら、液肥(やさい燐加安540の300倍液等)で追肥を行う。

本ば管理

1 耕起・畝立て

排水良好な圃場を選び、堆肥、苦土石灰を散布し、深耕する。基肥施用後畝立てを行うが、畝幅150cmとし、できるだけ高畝(20cm以上)とする。



2 施肥

施肥例 (kg/10a)

肥料の種類	総量	基肥	追肥		成分量		
			定植15日後	発蕾時	N	P	K
完熟堆肥	2,000	2,000					
苦土石灰	140	140					
熔燐	20	20				4.0	
そさい3号	100	100			15.0	15.0	15.0
やさい燐加安540	50	50			7.5	7.0	5.0
NK化成2号	50		30	20	8.0	0.0	8.0
合計					30.5	26.0	28.0

3 定植

1) 定植時期

春播き：本葉 3.5 枚（育苗日数 40 日）で定植する。

夏播き：本葉 2.5 枚（育苗日数 25 日）で定植する。暑い時間帯の作業はできる限り避け、気温の下がる夕方に行う。

2) 栽植密度

畝幅 150cm × 条間 50cm × 株間 35cm × 2 条千鳥植え = 3,800 株/10a とする。

3) 苗の灌水

植え傷みを避けるため、苗運び前及び定植時に十分に灌水を行う。定植後も活着するまで乾燥させないように注意する。

4 追肥・土寄せ

定植 15 日後（追肥）、発蕾時（追肥）に追肥を行う。

1 回目の追肥（定植 15 日後）と同時に小型管理機等で土寄せを行う。土寄せは時期が遅れると断根の恐れが大きいため、適期作業に努める。

5 かん水

乾燥が続いたら、気温の低い夕方に短時間の畦間かん水を行う。

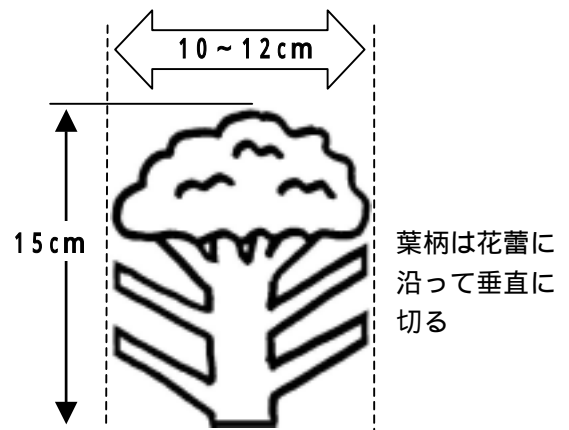
6 収穫・調製

1) 収穫適期幅が短く、遅れると花蕾が開いて軟らかくなるなど品質が著しく低下するので、適期収穫に努める。

2) 花蕾直径 10 ~ 12 cm を目安に収穫を行うが、花粒が鮮緑色で締まり・揃いが良く、黄化花蕾やリーフィー（挿し葉）のないものを収穫する。

3) 収穫は涼しい時間帯に行い、花茎長 18 cm くらいで切り取り、濡れている場合は 2 ~ 3 回振って水を切る。涼しい場所ですみやかに調製を行う。

4) 調製は余分な葉を切り落とし、花茎長 15 cm に切り揃え、箱詰め後はできるだけ早く予冷庫に搬入する。



ブロッコリーの調製方法

生理障害

リーフィー（挿し葉）：花蕾の間に小葉が混ざって発生するもの。花芽分化後、十分生育しないうちに高温にあうと花梗の小葉が伸長して挿し葉となり、品質を低下させる。作型にあった品種選定に注意する。

ポトニング（早期出蕾）：株が十分に大きくならないうちに小さい花蕾ができて、それ以上大きくなれないもの。老化苗での定植、生育初期での極端な低温、肥効不良などで発生しやすい。作型にあった品種選定、適期苗での定植、本圃での肥料切れ、乾燥、断根などに注意する。



リーフィー（挿し葉）



ポトニング（早期出蕾）

病虫害防除

軟腐病：花蕾、地際部の茎が腐り、悪臭を発する。高温多湿の条件下で傷口ができた場合や窒素過剰で軟弱に生育した場合に発生が多くなる。適正な施肥量を守るとともに、降雨時の収穫をできる限り避ける。

黒腐病：葉の縁に、黄色でくさび形の病斑が生じ、葉脈が黒変する。土壌伝染し、多雨・多湿で発生が多くなる。アブラナ科の連作を避けるとともに、排水対策を徹底する。

コナガ：全期間を通じて発生する。殺虫剤をローテーションし、定期的に防除を行う。

ヨトウムシ：集団発生する傾向があり、大きな被害をもたらす。発生初期に集中的に防除する。

販売のポイント

鮮度が重視される品目であり、直売・インショップ等では「朝どり」により更に付加価値が高まる。収穫が遅れると品質が著しく低下するので、適期収穫を徹底する。